

# 中世・草戸千軒探検 ⑮

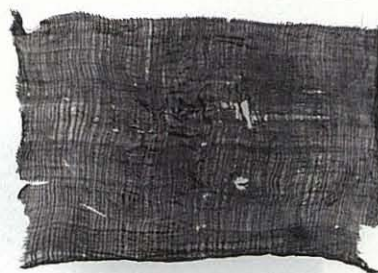
よそお  
～装う～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、

人々の生活の様子を紹介しています。

今回は「書く」のコーナーで、民衆への文字の広がりを探りました。今回は、「装う」のコーナーです。

草戸千軒の町に暮らしていた人々が、どのような衣服を身につけていたかを知ることは容易ではありません。遺跡からは170点ほどの繊維製品が出土していますが、大部分は布の断片で、着物の形までが明らかになるものはありません。したがって、絵巻物などに描かれた服装から推測するしか方法がないのが現状です。



出土した布

出土した繊維製品は、多くが苧麻（カラムシ）などを原料とする麻布だと考えられています。中世には木綿は生産され

ておらず、その普及は江戸時代以降のこととされており、出土品からもそのことがうかがえます。

衣服が明らかになっていないのに対して、身なりを整えるための化粧道具や装身具はいくつか出土しており、人びとの装いを復元する手がかりとなっています。



檜垣萩双雀鏡

その一つ、檜垣萩双雀鏡は顔を写すための青銅鏡です。写真は鏡の裏側で、こうした和風の文様をもつ国産の鏡は、平安時代末期から中世にかけてさかんに製作され、「和鏡」と呼ばれています。

化粧品としての紅や鉄漿（お歯黒）を入れる皿も、井戸の底から重なった状態で出土しています。紅皿は、中国産の青磁碗を利用したのですが、割れた碗が漆で接着されており、漆の部分に紅が残っていたことから、紅皿として使われたことがわかりました。鉄漿皿は、スズと鉛の合金で作った花形の皿です。これらが井戸に埋められたのは、化粧道具に神秘的な力があると信じられていたためと考えられます。



井戸の底から重なって出土した  
紅皿(下)と鉄漿皿(上)

このほか、髪を梳く櫛や、髪飾りである笄なども何点か出土しています。当時の都である



出土した櫛

京都に暮らす人々の装いは、文字に記された記録や、神社に奉納された化粧道具、絵画資料などから探ることができます。しかし、地方に暮らす人々がどのような装いをしていたのかを知るための手がかりはほとんどありません。そうしたなか、草戸千軒町遺跡から出土した化粧道具は、地方の町に暮らす人々の装いを示す貴重な資料となっています。

(主任学芸員 鈴木康之)